

表彰・受賞

国際皮膚科学会連盟 (ILDS) からの感謝状受賞の報告

石井則久

国際皮膚科学会連盟 (the International League of Dermatological Societies : ILDS) から2023年に感謝状 (Certificate of Appreciation) を受賞しました。

ILDSは世界80か国以上、170以上の皮膚科関連学会の最大の集まりです。日本皮膚科学会 (日皮) や日本臨床皮膚科医会 (日臨皮) もメンバーです。ILDSは国際的リーダーシップ、および人道的活躍に対して貢献した皮膚科医を表彰しています。毎年10名前後が選ばれています。今回、日本皮膚科学会の推薦を受け、世界でも数少ない名誉ある受賞者となりました。受賞のカテゴリーは、人道的活躍部門でした。

日皮のHPをみると、現在までに23名の日本人が受賞していますが、大学教授以外では山本一哉先生と私の2名です。

私は1978年に横浜市大を卒業し、横浜市大皮膚科に入局。2000年には国立感染症研究所ハンセン病研究センター、2018年には国立療養所多磨全生園、2021年には茨城県つくば保健所に奉職し、2022年に引退しました。受賞の内容は、医療サービスが十分でない国や地域の人々の皮膚の健康の改善のため無欲で、人道的、献身的に活動したことです。WHOが対策に力を入れている顧みられない熱帯病 (Neglected Tropical Diseases : NTDs) であるハンセン病、ブルーリ潰瘍、疥癬を中心とした活動です。

途上国での疾病 (ミャンマーでのハンセン病、コートジボワールでのブルーリ潰瘍/ハンセン病) に対して、簡単で安価な検査法の確立、治療の実践、患者の発見、後遺症予防などをめざして現地の医療関係者と共同で活動しました。途上国では我々がいなくなっても、彼らが継続的に活動できるのが目標です。

国際機関での会議や講習会での指導や取りまとめ (WHOでのハンセン病/ブルーリ潰瘍、笹川保健財団でのハンセン病) を行い、今後5年、10年後の対策を作り上げていきました。

日本を含め先進国では皮膚感染症は「顧みられない (忘れられた) 皮膚病」になりつつあります。その中で、日本での感染症対策も重要です。患者数の減った日本人および外国人ハンセン病患者の診断・治療のサポートを行い、特に外国人に対しては、金銭面での援助や就労の支援などが必要でした。日本版ガイドラインも作成し、WHO版ガイドラインについても意見を述べました。さらに14年間に亘り毎年皮膚科医にハンセン病講習会を開催し、約400人が受講し、ハンセン病の知識を身につけました。

また途上国で多い抗酸菌感染症のブルーリ潰瘍が日本でも存在することを明らかにして、診断・治療・疫学・感染症対策の方向性を作り上げました。

疥癬は日本では患者が年間10万人前後いますが、治療薬が無く、診断法も曖昧でした。そこでイベルメクチンの国内導入、新規外用薬開発、疫学研究などを行い、国際学会で報告すると共に、日本発のガイドラインを日本語・英語で作成し、世界水準の疥癬診断・治療の方向性を示しました。

疥癬のイベルメクチン内服薬保険適用に当たっては、神奈川県皮膚科医会の皆様には多大なご協力・ご支援をいただきました。日本における疥癬の患者数の把握のため、神奈川県・東京都の皮膚科医会の先生方にアンケートを送付し、回答していただき、年間約16万人の患者と推定できました。さらに、ガイドライン作成では、加藤安彦先生、竹崎伸一郎先生、木花光先生、林正幸先生、朝比奈昭彦先生、浅井俊弥先生、田村暢子先生の



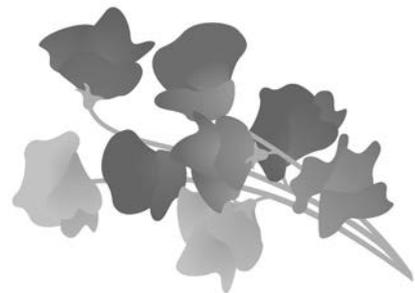
ご協力をいただきました。ありがとうございました。治験なしで保険適用になり(イベルメクチン)、さらにフェノトリン外用ローション(スミスリンローション)も上市できました。

途上国の若手研究者の日本での研修事業では、国立感染症研究所ハンセン病研究センターに東南アジア、アフリカ、中米の研究者を6年間に亘って合計26名を集め、9か月間ハンセン病研修を主催し、帰国後、全ての研究者が本国で活躍しています。

国立駿河療養所とJICA横浜で行った横浜国際保健サマーワークショップ(合計4回)では、若い学生が国際舞台で活躍できる一歩を後押ししました。

皮膚科、感染症、国際協力をキーワードに多くの先輩、同僚、後輩、友人に支えられ、活動をさせていただきました。神奈川県皮膚科医会の先生方には多大な援助、激励をいただきました。これらの力があっての受賞でした。皆様に感謝いたします。

今後は若い先生方にも日本のみならず世界に眼を向け、病む人々へ手を差し伸べるチャンスを作っていきたいと思います。



厚生労働大臣表彰を受賞して

国保審査委員・いずみ野皮ふ科 増田智栄子

2023年9月半ば、午前の外来診療中に神奈川県国保の事務の方から「厚生労働大臣表彰に推薦したところ受賞が決定しました」とお電話をいただきました。優れた業績があったわけでもなく、1999年から24年間審査業務を滞りなく行ってきたことをご評価いただいたものと大変有難くお受け致しました。

10月20日、霞が関近くのベルサール虎ノ門にて国民健康保険関係功績者厚生労働大臣表彰式に出席しました。当日は全国から58名が受賞し、受賞者代表として謝辞を述べさせていただきました。これもおそらく近隣県からの女性ということで決まったものと思われませんが、いい経験をさせていただきました。



表彰式で大臣代理の事務次官に謝辞を述べる

謝辞は、もちろん私が勝手に作成したものではなく、厚労省の官僚が作成したものを読み上げさせていただいたまです。その内容にはかなりの財政上の切迫感がありました。以下内容の抜粋です。

「時代の変化に対応するため平成30年度に大きな制度改革を行いました。また、人口の急速な高齢化の進展で財政上の厳しさが増し、医学の進歩等による高額な医療費も増えてくるなど、国民健康保険財政を取り巻く環境はますます厳しいものとなっております。我々はこれからも国民健康保険事業の発展のため全力を尽くしてまいります。」

ところで、平成30年度の制度改革をご存じでしょうか。それまで市町村管理で国税と市町村税を投入してきましたが、市町村格差もあって立ち行かなくなり、県が国保財政の「入り」と「出」を管理するようになりました。国保財政には国税、市町村税と県税が投入されています。

医療費の財源構成は、自己負担額が3割2割1割と高額療養費も含めますので全体の15%、保険料が52%、税金が33%となっています。月々の保険料掛金は年々かなりの勢いで上がっているのは皆様も実感されていると思います。

外来診療で、「先生、このほくろもこのほくろも保険で取って欲しい」「先生、ビタミンCを保険で出して」と要求されることも少なくありません。美容は保険給付外です。私たちの保険料と税金など公的資金をつぎ込んでもいいかどうか、医療費のことも考えながら日々診療に当たっていただきたいと思います。突っぱねることも保険医の務めです。

昨日も審査に行ってきました。生物学的製剤や分子標的薬の適応症が拡大されたことで一挙に平均点が上がっていました。いい薬ですので、安くなるまでどうか症例を厳選して大事に使用していただきたいと思います。

国民健康保険事業の発展のため尽力すると申し上げた以上、念のための過剰な検査、余分な外用薬処方、高額な感染症予防薬など目に余るものが散見されますので、どうぞ医療費も考えながら診療していただきたいと切にお願い致します。

時は流れて

杉田皮フ科クリニック 杉田泰之

本年3月19日に、令和5年度横浜市医師会学術功労者表彰を受けさせていただきました。これは横浜市医師会傘下の各科医会等における活動を対象とし、各科の医会や医師会からの推薦で毎年3月に約10名の表彰者が選ばれるものです。私を推薦していただきました横浜市皮膚科医会の増田智榮子前会長をはじめ役員の方々に心から感謝申し上げます。

なぜ私が表彰されたかといえば、まず第一に市医師会の委員を比較的長く務めさせていただいたからです。平成25年から8年間、横浜市医師会学術研修専門部会部員を務めました。この部会と同時進行で平成30年までの6年間は横浜臨床医学会学術集談会実行委員も務めました。前者の部会は市医師会の会長以下執行部と各科の代表者十数名が集まります。私が務めた8年間に会長は3名ほど交代されたと思いますが、会長や各科の諸先生方に身近に接する部会でした。価値ある人脈というのはこういうところで作られると感じました。後者の委員会は、毎年12月に全科が一堂に集まり、各科が1演題を講演する学術集談会を運営する委員会です。以前は各科の講演者は自分の割り当てられた時間だけ出席して、終わるとさっさと帰ってしまうことが当たり前でした。そこで、他科の内容でも聞きたくなる講演会にするため、積極的に知恵をだしあう非常に建設的な委員会でした。



2つの委員会を掛け持ち、ほぼ毎月1回午後7時までに桜木町に駆けつけるという生活の中、ある時保土ヶ谷区医師会長の浅井俊弥先生から、区医師会の理事になるようにご指名をいただきました。この上もう一つ増えるのは大変だなと思ったのですが、浅井先生には私の開業当時から一方ならぬお世話になっており、是非ご希望に沿いたいと思いました。そこで老獪な？名案を思いつき、市医師会の2つの委員会の片方を他の先生に交代していただけないかと医会の幹部に相談しました。「区医師会の理事になるのであれば、年3回しかない委員会のほうならば代理を探してあげましょう」という執行部のお許しがでて、渡りに船、とばかりに畑康樹先生に交代していただきました。その後数年がたち、学術研修専門部会についても8年務めたので、そろそろ次の方を会長推薦していただけないかと申し上げ、三上万理子先生に交代していただきました。

今回の表彰では他にも評価していただいた内容があり、望外の喜びでした。一つは、平成20年から平成24年にわたり、横浜市皮膚科医会の例会で私が提案した「ヒヤリハット事例集」を8回ほど担当させていただいたことです。これは日常診療の中でつい見過ごしたり、ヒヤリやハットしてしまうような事例を紹介するリスクマネジメントをテーマにしたものです。腎機能低下患者における抗ウイルス薬の処方、漢方薬の副作用、採血時に生じる自律神経反射は温めて様子を見るのではいけない、などが印象に残っています。何人もの先生から貴重な経験を教えていただき、自分の勉強のためにもとても充実感のある仕事でした。

さらにもう一つ評価していただいております。こちらは苦労もあったので感慨深いのです。それは、横浜市民病院皮膚科の病診連携のための横浜デルマカンファレンスという研究会を保土ヶ谷区の先生方と設立し、代表世話人として運営したことです。この会は市医師会の生涯教育講座としても認めていただき、15年間にわたり24回開催しました。毎回約30名の参加者があり、紹介患者の経過報告と特別講演からなる構成でした。発足当時はいろいろなメーカーが、是非次は当社で協賛させてほしいと、多い時では10社近くが待っている状態でした。ところがある頃からメーカー訪問がめっきり減り、こちらからお願いしても、縁もゆかりもない先生の講演が条件だったり、薬の売り上げにつながるテーマでなくては協賛できないなど、窮屈さが増してきました。テーマが乾癬ならば協賛してくれるという条件付き状態が何年も続き、最後の頃は5回連続で特別講演のテーマは必ず「乾癬」となっていました。苦勞してまでメーカーの宣伝をしなくても良いのではないかと

いう疑問がふつふつと湧いてきました。ついに協賛メーカー切れが現実となり、24回で中断せざるを得ませんでした。参加していただいた先生方には大変申し訳なかったのですが、苦渋の選択となりました。

時は流れ、還暦の一念発起でクリニックを移転してからもう3年が過ぎようとしています。自分が楽しいと感じることが仕事に直結することほど幸せなことはないと思います。皮膚病が良くなったと喜んでくれるお年寄りの笑顔が今の私の喜びでしょうか（ちょいキザでした）。



神奈川県医師会学術功労賞を受賞して

横浜西口菅原皮膚科 三上万理子

この度、おかげさまで令和5年度神奈川県医師会学術功労賞を頂戴しました。ハンセン病を含む皮膚感染症の迅速キット開発など、途上国医療活動と横浜市内皮膚CA-MRSA感染症サーベイランスをご評価いただき、受賞に繋がったと伺っております。原稿執筆の依頼をいただき、研究の世界との出会いの思い出を書かせていただきます。

僻地医療に従事すべく総合内科医を目指しましたが、皮膚科医になりたいと考えるようになり、父に石井則久先生を紹介してもらいました。初めてお会いした時に目指す医師像が石井先生の中に見え、生涯指導を受けたい師匠に出会ってしまったという気持ちでした。当時はまだ石井先生も、WHOや笹川財団のお仕事はされていなかった時期でしたが、出会いから15年後に師匠により世界への道が開かれていくものとなっていきます。

一方で、私が恵まれていたのは、臨床の指導を毛利忍先生と父から受けられたことです。診療医としての私の軸となりました。子宮内膜症で苦しんでいた私に“仕事だけではなく自分の健康と幸せを優先しなさい”と温かく包み込んでくださった毛利先生に、本当に会いたいです。出産後現場復帰しますが、父が病に倒れ、32歳の頃より子どもを母に預けて必死にクリニックを守った時期は本当に辛かったです。当時助けてくださった能勢由紀子先生にお礼を申し上げたいです。その頃あらゆる意味で余裕がなかった私と息子の思い出は江ノ島水族館ですが、魚と触れ合うことで癒された息子はその思い出を大切に成長し、海洋生命学科に入学しました。一方私はワンヘルスサイエンス学会の理事のお役目を頂戴し、昨年は年次総会の会頭を務めましたそこで初の学生セッションを設け、息子が演題発表、母が座長という貴重な経験をさせていただく事が出来てとても幸せでした。ワンヘルスサイエンスとは人間と動物、生態系の健康を一体として捉える考え方であり、人獣共通感染症や薬剤耐性など様々な問題に各領域の専門家が協力して取り組むものになりますが、まさにSDGsそのものなのです。そのSDGsの中に顧みられない熱帯病(NTDs)を制圧するという目標が掲げられています。NTDsとはWHOが定める熱帯病21疾患ですが、抗酸菌であるハンセン病とブルーリ潰瘍(BU)が含まれています。40歳頃より石井先生、相原道子先生、鈴木先生(基礎)にご指導をいただく機会を得ました。開業医としては本当に稀なことで、このチャンスを逃したくないと必死に掴みにいったのを覚えています。BUの新規治療法をテーマに学位を頂戴し、そのデータをWHO本部開催の国際学会で発表、新規治療の提案をして参りました。現在もAMED、科研費などハンセン病、BUの研究をアフリカ、フィリピン、インドネシアなどと共同研究しています。主に、疫学調査、wound management、遠隔診断アプリ開発、迅速検査キットの開発、後遺症リハビリ、エコー検査などに関わっています。色々な国の保健省や病院で多くの国の医療従事者と交流をとり、globalな活動に注力しております。この活動を通し、琉球大学皮膚科の先生方、基礎医学の先生方と一緒にすることができました。基礎医学の教室は帝京大学臨床検査学科と東京薬科大学薬学部病原微生物学教室にお世話になっています。

毎年、科研費、大山財団、高木賞に研究費の申請を続けました。残念ながら大山財団は年齢制限までに研究費獲得に至りませんでした。昨年のワンヘルスサイエンス学会年次総会の支援助成金を頂戴することができました。科研費は51歳にして7年かけてやっと採択され、おかげ様で2022年には高木賞を、2023年には日本臨床皮膚科学会学術集会・最優秀ポスター賞を頂戴しました。原稿は可能な限り一生懸命執筆し、皮膚科に限らずあらゆる学会で発表をして参りました。毎日必死でしたが、いつの間にか業績を積み重ねることができ、神奈川県医師会学術功労賞に繋がったのだと思います。そして何より応援し、ご推薦くださった先生方のおか



神奈川県医師会学術功労賞を頂戴して

げと思っています。また、私が尊敬してやまない増田智栄子先生のご指導のもと、横浜市皮膚科医会の先生方にご協力をいただき、東京薬科大学の中南教授との共同研究でサーベイランスが行えたのはとても恵まれていました。横浜における新規株の流行を把握することができました。

このような経験をさせていただいたことに本当に感謝しています。ですが、個人で活動しているため倫理審査についての把握が十分ではなく、お叱りを受けた経験もあります。今後、開業医が研究や論文執筆をする上で、倫理審査について我々が学ぶ機会が増えることを願います。私はICRwebで研修し、倫理審査は神奈川県医師会様にご指導をいただいておりますが、いつも丁寧に指導くださり本当にありがたいです。今後ともどうぞ皆様よろしくお願ひ申し上げます。

